

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991300336		
法人名	社会福祉法人 清幸会		
事業所名	認知症高齢者グループホーム第2まつばら荘		
所在地	栃木県那須塩原市黒磯647-5		
自己評価作成日	令和4年8月22日	評価結果市町村受理日	令和4年10月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

『笑顔とぬくもりを大切に、寄り添いながら「いつまでも自分らしく」生活できるよう支援します』を事業所のスローガンとし、利用者様やご家族様に安心を感じて頂けるような関わりと支援に努めていきます。定期的に訪問看護、訪問診療とも連携を取り合い、利用者様の病状管理や健康管理も行っています。利用者様にとっての第2の家として、安心して生活して頂けるような関係作りや環境作りに配慮しています。裏庭の一角を畑とし、利用者様と一緒に野菜の収穫を行うなど、外出しなくても楽しめるような取り組みを行っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は小規模多機能型居宅介護事業所と併設になっていて、『笑顔とぬくもりを大切に、寄り添いながら「いつまでも自分らしく」生活できるよう支援します』の理念に基づいて、職員が付き添い、見守り、声掛けなどをすることで、自立支援を大切にしている。また、訪問診療医と訪問看護との医療連携体制が整っているため、適切な健康管理ができていくほか、希望者には看取りにも対応している。身体拘束適正化のための指針と虐待防止のための指針を新たに作り直し、会議や研修で理解を深めるとともに、現場でも丁寧に職員が振り返る機会を作っている。利用者一人ひとりの様子がわかるように工夫した毎月のお便りを家族に送っているほか、新たに発行した「第2まつばら荘新聞」で丁寧な情報発信をしている。事業所が独自で実施した利用者家族へのサービス満足度アンケートの集計等からは、多くの家族が利用者に対する事業所のサービスに満足していることが読み取れる。自宅の畑が気になるという利用者の思いに沿うために作った敷地内の畑では、今年ジャガイモやスイカが収穫できたので、おやつとして提供し利用者様に喜ばれた。また、移動販売車が来ると利用者様が職員に付き添われて楽しそうに好きなものを買ったり、リビングで見守られながら穏やかに過ごしていて、事業所内の生活の様子が温かく明るい雰囲気が感じられる。利用者様が笑顔で伸び伸びと生活できるように、管理者とリーダーが情報を吸い上げる努力をし、創意ある職員の提案により業務の改善を積み重ねて、利用者支援の質の向上につなげるよう一貫して取り組んでいることが窺える。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	令和4年9月15日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	『笑顔とぬくもりを大切に、寄り添いながら「いつまでも自分らしく」生活できるよう支援します』を事業所のスローガンとし、利用者様へ質の高いサービスを提供できるよう取り組んでいる。	管理者と職員は毎月の定例会議で理念を共有し、その理念に基づいて、利用者が『「いつまでも自分らしく」生活できるように』、職員が付き添い、見守り、声掛けなどを行うことで、自立支援を大切にしている。日々の生活では、事業所として大まかな流れがあるものの、職員は利用者へ声掛けをして、本人の意向の確認をしながら、やることを決めたり、時間を決めたりすることが強制にならないように、配慮している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染拡大防止のため交流の機会を設けることができていない。交流できる日常が戻ってきたら積極的に交流の機会を設けていきたい。	管理者が兼務している併設の小規模多機能型居宅介護事業所には、近隣住民の利用者が増えてきている他、運営推進会議の委員である民生委員や自治会長には、管理者が毎回会議の資料を直接届けているので、その際にコミュニケーションを取るようになっている。「地域住民とあいさつをしながら交流を続け、コロナ禍が落ち着いたあかつきにはボランティアの来荘や地域住民を招いてのお祭りを再開したい」と、管理者は考えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	直接交流することはできないが、電話等で相談頂ければ最大限のご協力をする。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度の書面開催を継続している。各方面からのご意見を頂けるため、サービスの質の向上に繋げやすい。	運営推進会議は、コロナ禍で長く書面開催が続いているが、委員に配付する会議資料の他に、利用者やサービスの実際、日々の職員の取り組み等がよくわかる資料も添付している。特に、新たに発行した「第2まつばら荘新聞」が、事業所の取り組みがとてもしっかりと紹介されていると好評を得ている。前年度調査時は欠員だった利用者家族の委員も選出して、運営推進会議に参加してもらえるようになった。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に出席して頂く事で、様々な報告ができています。また、相談にもものって頂き協力関係を築いている。	コロナ禍になって、市からは使い捨て手袋やマスクなどの物資の配布が年に2、3回あり、事業所としては助かっている。運営推進会議では事業所管轄の担当課職員に資料を送付して意見を返信してもらっている。新型コロナウイルスワクチンの追加接種の際には、新型コロナウイルス感染症対策室と連携を取って、事業所に利用者全員の接種券をまとめて送付してもらうなど、市の複数の担当部署と協力関係ができています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体的拘束等適正化委員会を通して、身体拘束に対する理解は深まっている。様々なケースで、身体拘束に該当するかどうかの話合いも行っている。	令和3年度に実施した「虐待の芽チェックリスト」の集計結果を職員に配付し、意識づけに活用している。また、身体拘束適正化のための指針と虐待防止のための指針を新たに作り直して、令和4年4月から運用を開始した。指針に基づき、両委員会を年6回開催するとともに研修も実施しながら、職員は指針の内容について理解を深めるようにしている。スピーチロックを無意識に行ってしまう場合でも、「何が悪かったか」を職員自身に考えてもらうように、リーダーが丁寧に現場で指導している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者様の身体に傷・痣等を発見したら、即座に記録に残し、周知の徹底をしている。各職員がそれを行うことで、利用者様の観察・丁寧な介助を行うようになっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、当事業所では権利擁護制度を利用されている方はいらっしゃらないが、各職員に理解して頂ける様に情報を発信している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に十分に説明を行っている。疑問や質問があった際にはその都度お答えしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約の際、ご意見等があった場合の相談受付窓口についてお知らせしている。利用者様、ご家族様との関わりの中で、ご意見があった際にはいつでもご意見をいただける関係作りを心掛けている。	令和3年度に、利用者家族に対して、サービスについてのアンケート調査を事業所独自で実施した。無記名で記入して返信用封筒で返送してもらうようにして、多くの家族から利用状況や事業所の取り組み等の各項目に対して、高評価の回答を得ている。集計したアンケート結果は、運営推進会議で資料として配付するとともに、職員全員で共有して、「日々の支援を頑張ろう」という意識を高めると共に、利用者家族との信頼関係を深めるといった効果を上げている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、日常において職員の意見を聞く努力をしている。また、不定期に開催している全体会議、年2回実施している個人面談、毎月実施している会議等で、職員が意見や提案を言える機会がある。	管理者が現場に行き行って直接職員から意見を聞く機会を確保する努力をしているほか、立場的に職員が相談しやすいリーダーが職員の意見を集約して、管理者に報告するようにしている。自室にこもりがちだった利用者には「食べるのが遅いことを気にしている」という意外な理由があることに気づいた職員の意見により、他の利用者にも遠慮なくいいように、少し早めにホールへ誘うよう配慮したところ、徐々にホールに出てくる機会が増え、活動量が増えるきっかけになった事例がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の人事評価制度を導入しており、努力や実績の把握、評価をこなしている。面談も併せて行い、職員の意向や気持ちを確認し、向上心を持って働けるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は人材育成に力を入れており、年間計画を立てて研修を行っている。事業所に赴き、管理者や職員個々のケアの実際と力量を把握している。法人の介護技術マニュアルに基づき統一したケアが出来るよう取り組んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市のケアマネージャー連絡協議会へ積極的に参加したり、地域密着型サービス事業者連絡協議会等で交流する機会が作れるよう努力している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にはご本人、ご家族からの要望を確認し、過ごしやすい環境を整えるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族から不安に思っている事や要望などを伺い、解決策を話し合うことで双方が課題を共有し、関係づくりもできている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談があった際、現状を確認したうえで、必要な支援を検討し、状況に応じては、他施設のサービス紹介をする等、柔軟な対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様に仕事をお願いしてきたことで、「何でもやるから持ってきて」など、利用者様からそのような声掛けをして頂けるようになった。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月のお便りに近況報告の欄を追加している。更に、適宜、電話にて連絡を入れ状況を伝えている。面会は直接的にはできないが、窓越しで電話を使用して会話をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	新型コロナウイルス感染症により、面会制限をせざるを得ない状況ではありますが、ご家族様を中心にお便りや電話での連絡を実施している。	利用者一人ひとりの様子がわかるようなお便りを工夫して作成し毎月家族に送付している。また、面会時には居室の大きな窓越しに、利用者と家族が互いに事業所の携帯電話を使って会話をできるようにして、家族との関係性が途切れないよう配慮している。利用者から、「昔桜の名所だった隣の山が懐かしい」という声が上がったことをきっかけに職員間で検討した上で、今年は全員で花見に出かけた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う方が話せるような配置を心掛けている。必要に応じて席の配置を検討、変更し、新たな関係性の構築を伺っている。レクリエーションでも全員で参加できる風船バレー等を取り入れている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居や入院となった場合でも、いつでも気軽に相談できる関係作りに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや意向は、日々の生活の会話の中から引き出し、把握に努めている。重度化され、ご本人からの把握が困難な場合は、ご家族の方の意見等も取り入れ、その人らしく暮らしていただけるよう支援を行っている。	事業所の理念に基づいて、職員は常に利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めており、本人本位の支援が実践されている。入居前から利用していたマッサージを事業所でも受けていた利用者が、保険上の問題で受けられなくなった際も、利用者のふさいだ様子から「思い」を家族に伝える必要があると判断し、家族と相談の結果、継続できるようになった。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時にご家族、ご本人から情報、生活歴の記入・アセスメント・日常会話を元に把握を行っている。入居後も日常会話の中でご本人からどのような生活をしていたのか等を聞く機会を設け、情報が増えるよう努力している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常の様子・会話から現状の把握を行い、変化があればその都度、記録に残し職員間で共有を行っている。本人のできる力を発見できるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は協力医、家族と本人の意向・希望を基に、日々の記録や状況報告を参考に作成している。定期的に職員間での話し合いの場も設け、身体状況に変化が生じた場合はその都度、現状に応じた介護計画を作成している。	日々の支援の中で職員が利用者の状態を把握し、月一回の定例会議の中でモニタリングを行っている。モニタリングの中で利用者の状態の変化が確認された際はカンファレンスを開き、プランや方針の変更が必要になった際は計画作成担当者が再アセスメントを行ってプランを作成し直している。病気のために入院していた利用者が退院した際、回復状況を注視していたが、もとの状態に戻ることが難しいと判断されたため、要介護認定区分を変更し、これまで見守りでできていたトイレや入浴時に、職員による支援を加えるように介護計画を見直した事例がある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の申し送りにて微妙な変化や気づきを情報共有している。また、それを基に介護計画の見直しをしたり、生活課題と対応を変化したりしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者様の状況の変化に合わせて臨機応変に対応している。ご家族とも相談しながらその都度対応を行うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	必要性に応じて、医療、家族、近隣の方・ボランティア・民生委員等と協力をを行い、ご本人を支える支援を行っているが、今年度も新型コロナウイルス感染予防の為交流等は行っていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に希望する医療機関を確認している。その医療機関において、定期受診を行っている。 ご家族が受診対応して下さる際には事業所までのご様子をご家族にお伝えしている。	入居前のかかりつけ医に定期通院している利用者は一人のみで、他の利用者は事業所で定期的に訪問診療医の診察と訪問看護師の状況チェックを受けている。訪問診療を受ける利用者が増えたことで、病状を伝えやすくなったり、服薬の変化にも1か月を待たずに対応できるようになったほか、訪問診療医から事業所内で新型コロナウイルスワクチンの追加接種を受けることができた。さらに、訪問歯科診療も導入して利用者の便宜を図り、医療と介護の連携で適切な健康管理ができています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護との連携は週に1回定期訪問を依頼している他、24時間の連絡体制を整えている。常に看護師と相談助言・情報の共有を行っており、適切な看護を受けられる体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中の様子については定期的に医療機関と連絡をとりあいながら経過の情報を得ている。 退院の際には看護サマリーやリハビリ経過報告書をいただき、入院中の経過を確認している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居される際の契約時に、終末期のあり方、重度化した場合の対応について、事業所ができることできないことを説明しており、本人・ご家族の希望を確認している。状態に応じ、適宜、その確認を行っている。終末期には状況について医師からご家族へも説明していただいている。	訪問診療と訪問看護の支援を受け、さらに職員への研修を実施することで、終末期の医療と看取りの体制ができあがっている。利用者本人と家族の希望があり、多くの医療介入の必要性がない老衰状態であれば、事業所での看取りが可能である。調査時、看取りの段階に入った利用者がいて、医師の指導の下、職員の介護と訪問看護師による状態観察を続けており、家族も毎日見舞いに来ているとのことで、チームで支援にあたっている様子が見えかけた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故に備えてマニュアル作成を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災は年2回、昼・夜間想定をした総合避難訓練を実施している。毎月、自主避難訓練も実施している。以前は地域の防災会会長にも協力をいただき、実施していたが新型コロナウイルス感染症予防の為、自粛している。	市のハザードマップでは、事業所は洪水や土砂災害の危険区域に入っていないが、水害、地震、火災のどれもリスクが高いと考えている。火災等の災害に備えて避難訓練を実施した際に、想定していた動作が抜けてしまうことがあり、落ち着いて確実に行うことが必要であると職員は認識を新たにしていく。法人では他の大きな事業所についての災害時と緊急時のBCPは策定済みであるが、グループホーム、および併設の小規模多機能型居宅介護事業所のBCPについては策定されておらず、研修を受けながら内容について検討しているところである。	現在、隣接地で道路建設のために水路の大規模な改修工事が行われている。隣地に工事で排出された土砂がうず高く積まれていることから、市担当課や工事業者等との情報交換や連携を図り、土砂崩れの危険性がないか注意していく必要があると思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	常に言葉遣いに注意しながら接している。利用者様の性格や考え方に合わせ、言葉の掛け方、対応をしている。	プライバシー保護マニュアルを策定し、毎年4月に職員に対するマナーや利用者対応をテーマとした研修を実施して、利用者尊重の介護を定着させていく。理念に「いつまでもその人らしく生活できるように支援する」とあるように、一人ひとりに合わせた生活の工夫をしている。例えば、リビングではなく居室で食事をとりたいと希望する利用者にはそのように対応するとともに、リビングでも過ごしてもらえるよう、声かけなどを工夫している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の関わりの中で利用者様からの希望や意見について、意向を確認し、支援にあたっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できる限り、本人のペースを大切にした支援を行っており、業務中心にならないよう入居者一人ひとりを常に意識するよう心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	事業所へ出張理美容を依頼している。ご利用者様から希望があった際には依頼し、ご本人の希望を取り入れてカットやカラーなどしていただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備、片付けについてはできるところの協力をお願いしている。食事のメニューは栄養バランスを考慮して外注しているが、時々、利用者様のリクエストを取り入れたりと楽しみを持ってもらえるよう工夫している。	開設当初は事業所内で調理をしていたが、令和3年から業者から届いた食材を再加熱調理機を活用して提供する方式に変更している。事業所としては、職員が食事の準備に手を取られることなく、利用者支援に専念できるメリットが大きいと考えている。外注している業者のメニューにも行事食が組み込まれているが、時には特別食を発注している。事業所の畑で収穫できたジャガイモをふかしたり、8月1日には地域の風習である「釜の蓋まんじゅう」を利用者と一緒につくりしている。利用者の誕生日には、職員が炊飯器でケーキを焼き、デコレーションして提供することもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事形態や食事量についてはご本人の状況に合ったものを提供している。水分摂取量にも配慮し、摂取できているかの確認をしっかりと行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの促進・実施をしている。ご自身でできる方については見守りし、介助が必要な方については必要な介助を行っている。状況に合わせて口腔ケアの方法も検討し対応している。訪問歯科診療の取り組みも開始した。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、排泄状況の確認を行い、定期的にトイレへの声掛けや誘導を行っている。	各居室に完備されているトイレを使用する利用者が多いが、車椅子を使用している利用者は自室のトイレは手狭であるため、広さのある共用のトイレを使用している。利用者それぞれの排泄間隔や量を把握し、適宜声かけを行ってトイレ誘導をしている。自室での転倒事故がないようにセンサーマットをベッド下に設置し、リビングの一角にある職員の事務スペースで利用者の動きを察知して、必要な際はすぐに対応できるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便記録を残し、排便状況の確認を行っている。排便が確認できない際には食事摂取量や体調面での確認を行い、医師や訪問看護の看護師に連絡し、相談をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	利用者様の体調や気分などを確認しながら無理の無いよう入浴していただけるようにしている。午前、午後の希望に添えるよう配慮し、利用者様の能力に合わせた支援を行うことで、安全に入浴して頂けるよう支援している。	利用者によりゆったりとリラックスして入浴してもらうために、1日の入浴者数を3名までに調整して、職員も慌てないで安全を図りながら入浴介助をしている。湯温を利用者それぞれの好みに合わせたり、入る順番にこだわりのある利用者には好みに合わせたりして、入浴を楽しんでもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は、無理のない程度の活動をしていただきながら、休息を交互に取り入れ、本人にとって自然なリズムで過ごしていただけるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報を個人ケースに添付して内服薬の情報を確認できるようにしている。生活の様子を担当医へ伝え、内服薬が変更になった場合にも細かな状況を報告し、調整をしていただいている。内服薬に変更があった際には職員間で必ず情報共有を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者様の状況に合わせて、負担とならないように役割を見つけている。見つけた役割を習慣化し、利用者様の張り合いや喜びに繋げている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍の現状の中、外出の機会を設けることが難しい。事業所の敷地内が広く、散歩するには十分な広さがある為、天気の良い日には散歩へ出かけている。	コロナ禍で、利用者が日常的に外出する機会は減っている中、かかりつけ医を訪問診療に切り替えたため、ほとんどの利用者が通院による外出機会もなくなった。そのため、できるだけ外気に触れることができるよう施設周辺の散歩活動は欠かさずに行っている。また、毎週木曜日に訪問してくれる移動スーパー「とくし丸」は、利用者の楽しみとなっていて、調査日がちょうど木曜日で、来訪を知らせる音楽が聞こえてくると、いそいそと玄関先に出ていく利用者の姿が見られた。ドライブ外出も制限していたが、感染対策をとりながら、今春には那須町の愛宕山に花見に出かけることができた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金については管理が難しいため、基本的に、ご家族に協力を頂いている。ご自身で買い物を買いたいという場合には事業所で立て替え、必要なものが購入できるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者様から要望があった場合には、ご家族への電話連絡も対応させて頂いている。利用者様宛に届いた手紙についてはご本人へお渡しさせていただき、いつでも読めるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	照明の明るさや換気に十分配慮している。季節に合った装飾を行い、室内にいても季節を感じて頂いたり、利用者様が作った作品をリビングに展示し、皆で共有できるよう工夫している。	キッチン付きのリビングルームからは、窓が大きいので建物の周りにある森の緑がよく見える。調査日が「お月見」の翌週だったので、花瓶にはススキが活けられていて、壁には以前に利用者と職員が作った秋の貼り絵の作品が飾られていて、季節感を出していた。テーブルの形が台形になっているので、目的に応じてレイアウトを変えることができ、中心部分を広く開けて丸く並べて配置し、職員が中に入って介助をしたり、利用者全員がテレビ画面がよく見えるようにしていた。お互いの顔がよく見え、また、コロナ対策として人と人の距離を適度に保つためには都合が良いように感じられた。食事時間も穏やかな雰囲気が進められていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者様の状況により、テーブルや席の配置、照明の明るさ等、臨機応変に対応している。気の合う利用者様同士で楽しい時間が持てる、ゆっくりとした時間を過ごしたい等、それぞれの方が過ごしやすくなるよう配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	全居室にトイレ、洗面台が設置してあり、自室で過ごす際にはご自身のペースで使用できるようになっています。入居の際にはご自宅が使われていた馴染の物を自由に持ち込んでいただいている。	居室にはトイレ・洗面台が組み込まれているほか、マットレス付きベッド・エアコン・小ダンス・床頭台・加湿器・カーテンなどを完備している。壁面を利用するために、事業所でコルクボードを設置し、利用者が塗り絵で色づけた月々のカレンダー、誕生日や母の日に贈られたメッセージ色紙などが飾られている。家族写真を飾っている利用者もいる。洋服をたくさん持っている利用者はハンガーラック(洋服掛け)を持ち込んで使用している。窓が大きく明るい上、トイレも完備されゆったりとした間取りのため居心地がよいので、入居した直後はリビングよりは居室で過ごす利用者が多い。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内の整理整頓を徹底し、生活する中で、ご自身で自由に動ける環境作りを行っている。各居室入り口に目印や表札をつける等、工夫をしている。		